View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

brought to you by CORE

provided by Kyoto University Research Information Repository

KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository

KYOTO UNIVERSITY

Title	実験的膵空腸吻合術後の膵の機能的並びに組織学的研究(Abstract_要旨)
Author(s)	徳家, 孝
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	1966-03-23
URL	http://hdl.handle.net/2433/211780
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

Kyoto University

【185】

氏名	徳家　孝（とくか　たかし）
学位の種類	医学博士
学位記番号	論医博第254号
学位授与の日付	昭和41年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**実験的膵空腸吻合術後の膵の機能的並びに組織学的研究**
論文調査委員	（主査）教授 本庄一夫　教授 木村忠司　教授 伊藤鉄夫

論文内容の要旨

膵空腸吻合術に関しては，その術式の難易，膵機能保全の点より多くの異論があり，諸家の見解のわかれるところである。

著者は実験的に膵外分泌遮断を行なった犬に対して，挿入法により膵尾空腸吻合を行ない，挿入膵の壊死脱落の状態を日を追って観察し，膵空腸吻合術前後の膵組織所見，脂肪消化吸収能，及び一般状態について比較検討した。

すなわち，膵外分泌遮断により低下した脂肪の消化吸収能は，膵空腸吻合術後ほぼ正常値に復し，膵外分泌遮断により招来された膵の組織学的病変は改善された。

更に，空腸内に挿入吻合された膵断端は次第に壊死に陥り脱落し，その脱落痕は周囲より伸びた腸粘膜により被覆されるようになるが，膵管は腸管腔内に充分開口していることを証明し得た。

観察期間中，膵空腸吻合を施行した犬は次第に健康状態も良好となり，体重も常に増加の傾向を示した。

これに対し，対照犬として膵外分泌遮断のまま観察した群では，消化吸収能は依然低値を示し，一般状態も悪く，体重の回復も見られなかった。

従来挿入法は，術式が容易であり，生体に対する侵襲も少なく，且つ縫合不全等の術後合併症の危険も少ないが，膵管閉塞による消化吸収能の低下，膵組織の二次的変化の発生に対して危惧がもたれていた。

しかし，本実験により，従来懸念されていた膵管閉塞は起こらず，膵の外分泌は充分に保たれ，膵は組織学的にも，機能的にも満足すべき状態にあることが判明した。

論文審査の結果の要旨

膵頭十二指腸切除後，残存膵の機能を保持する目的で膵腸吻合術が行なわれるが，これには種々の方法がある。腸管内への膵断端そうにゅうによる吻合法は縫合不全の危険はすくないが，吻合後膵管がじゅう

ぶん開口し得るやいなや疑点なしとしない。

そこで，著者はこの点を確かめるため，実験的に膵管を結紮切断した犬において，そうにゅう法により膵尾空腸吻合を行ない，そうにゅう膵の状態を観察し，吻合前後の組織所見脂肪消化吸収能および一般状態について比較検討を行なった。

すなわち，膵外分泌遮断により低下した脂肪の消化吸収能は吻合後ほぼ正常値に復し，一旦招来された組織学的所見は改善された。

さらに，空腸内にそうにゅうされた膵断端はしだいに壊死化脱落し，その脱落痕は周囲より伸びた腸粘膜により被覆されるが，膵管は腸管腔内にじゅうぶん開口していることが証明された。

吻合後は犬は健康状態も回復し，体重も増加する。膵外分泌遮断のままでは消化吸収能も依然低値を示し，一般状態も悪く，体重の回復も認められない。以上の結果から，そうにゅう吻合法では従来懸念された膵管閉塞は起こらず，膵外分泌機能はよく保持されることが判明した。

本論文は学術上有益であって医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。